【巻頭言】

水辺の街で想うこと

日本沿岸域学会理事
東京海洋大学　流通情報工学科長
教授　苦　瀬　博　仁

水の道を訪ねる旅

10年近く前から、学会などで地方に出かけるとき、小さな街に寄り道することを密かな楽しみにしている。水に恵まれた我が国だからこそ、港町も河川に育まれた街も多い。海沿いや川沿いの鉄道と道路を利用すれば、旅そのものが水辺の街を訪ねる旅でもある。

物流を専門にしているため、河川舟運の成り立ちや、人々の生活を支えてきた産業に思いをはせる。往時の街の繁栄に思い巡らすことが、楽しみになっている。

実は、函館での全国大会の折りにも、レンタカーを借りて松前から江差を回ってみた。江戸時代の松前藩三湊（松前、江差、箱館）を見てみたいという理由と、北前船にまつわる知識を見聞きしたかったからである。旅の途中で鉄道廃線跡を見つけたり、青函トンネルの入口をながめたり、たまたま開催されていた「江差海鮮、活イカ刺し祭り」で舌鼓を打ったりと、予期しなかった出会いにも感激した。

交通ネットワークの変遷

古い歴史のある街には、必ずと言って良いほど、水辺沿いに蔵がある。その蔵こそが、往時の水運による栄華の証でもある。しかし、現在のひっそりとした佇まいが、繁栄を他の街に譲った結果であるとしたら寂しさもある。

我が国の物流体系の骨格は、河村瑞賢による東廻りと西廻りの廻船航路開発（寛文11年1671、寛文12年1672）を契機にできあがったと考えて良い。酒田や三国をはじめ、廻船航路で栄えた港町は多い。内陸部には、河川舟運で栄えた街も多い。街道と交差する場所、河川の合流点、舟を乗り換える地点などに河岸ができ、物資の集散地として繁栄していった。

明治時代に入り鉄道が発達すると、水運と鉄道の共存時代に入る。明治15年（1882）に始まる高崎線建設の主目的が、生糸の生産地と輸出港横浜を結ぶことにあったように、物流は鉄道建設の一つの大きな目的であった。どの駅にも、駅裏に倉庫があったように、輸送の主役は次第に鉄道に移っていった。

そして現在は、自動車が物流の主役である。

この変化のなかで、ある街は鉄道や道路と疎遠になって衰退し、ある街は交通機関の変遷の波を乗り継ぎ大都市へと成長していった。

街の履歴と行く末

地図を前にすると陸地に目がいってしまうから、半島は奥地にあり、島は陸地から切り離された土地に思える。しかし陸と海を逆転させてみると、別のことが浮かび上がる。

たとえば伊豆の下田は、航路から見れば「どうぞ寄ってください」というような地点にある。それゆえ廻船航路にとって重要な寄港地であった。しかし陸地からみれば半島の先端近くにあるのだから、陸上交通ネットワークの恩恵は受けなかった。現在の下田は保養地として名高いが、交通の拠点とは言い難い。備前の下津井や佐渡の小木も、往時の繁栄を面影だけに留めている。

同じように河川沿いの河岸の街でも、住宅地に変化したり、街の中心が駅前に移動したりして、往時を偲ぶことさえ難しい街もある。北上川沿いの黒沢尻（北上市）や淀川沿いの枚方は住宅地に変わり、盛岡では大きな家構えと小さな史料館だけが河岸の在処を伝えている。小京都と呼ばれる街は、郷愁を誘う蔵や古い街並みを資源として、観光の街へと変身してきた。

こうして街の生業が変化することで、水辺との接し方も変わってくる。物流のための水辺から、

生活や観光のための水辺である。

同じようにイギリスでは、産業革命の時代に物資輸送で活躍した運河が、現在ではボートによる観光ツアーに利用されている。コンテナ貨物が主流になって、港湾の古い桟橋や倉庫が、レストランや展示場などの観光スポットに転用されていることは、世界各地で見ることができる。

水辺の街が教えてくれること

水辺を眺めるとき、産業利用、観光利用、レジャー利用など、ついつい自らの興味や専門分野の限られた視線になりがちである。筆者であれば、物流という名の産業利用だろうか。そのため古い街を訪ねても、往時の物流の姿を探しもとめてしまう。そこには気に入った時代や場面だけを、都合良く取り出してしまう危うさがありそうだ。

しかし大きな自然の中の抱かれた水辺は、訪れる人の身勝手な眼差しにはお構いなく、街の生業にあわせて淡々と歴史を積み重ねている。それゆえ、将来の水辺のあり方を考えるときにも、水辺を自らの狭い専門分野に閉じこめずに、一歩下がって視野を広くするゆとりが欲しい。その方が、息が長く奥行きのある計画ができるに違いない。

物流に想いをはせながら水辺の街を訪ねる旅は、気楽な趣味の一つにでもなればと始めたのだが、それだけでもなさそうである。少しばかり気取ってみるならば、水辺の広くて深い懐と、自らの狭い視野を比較する旅でもある。

「自らの専門分野に限った思い入れだけで論じてはいけませんよ」と、戒められているように思うのである。